北翔大学教育文化学部研究紀要第６号
Bulletin of Hokusho University
School of education and culture department No.6

令和３年１月
2021 January

カール・バルトの病気論に関する断想

A fragmentary thought of the theory on illness of Karl Barth

大宮司　信
DAIGUJI　Makoto

１．はじめに

医療は自然科学的な知識の集積とその応用の中で進歩をとげてきたので科学技術と深い関係をもつが，医療における意味ということでは哲学・倫理などの思想領域と関係を持つ。例えば出生前診断における最近の進歩により，妊娠中にすでに胎児が重大な障害を持つとわかったときに中絶できるのか否かといった問題は，すぐれて倫理・哲学的な判断になろうし，また人間の死における延命や安楽死の問題も，技術的な問題もさりながら，よしとするか否かは思想上の判断に依存する。

また医療はこれまで生命の尊重や延長を公理的な前提にしてきたが，特に最近，生命をどのように考えるかを中心に，倫理的な判断や哲学的な意味付けが重視される状況になってきている。これは何も学問上の問題だけではなく，日々の臨床の中で医療人が問われ，もちろん当事者である患者や家族が直面する問題である。

このような医療の思想的な諸問題に関して，宗教はこれまでの長い歴史のなかで膨大な知識と経験を集積してきた。またそうした深刻な問題だけでなく，日常場面でも，出産祝い，葬式などの風習は，人間の生死と関連した儀礼として宗教が絡んでくる。

もちろん宗教といっても，例えば仏教とキリスト教では大きな違いがある。仏教はあえて大雑把にまとめれば，人間から出発して覚者，すなわち悟りを開いた存在に到達する道を探るという形式，すなわちボトムアップ型の宗教であるのに対し，キリスト教や回教は，神やアッラーから人間に下ってくる使信（メッセージ）を読み解き，そこに救いの契機を見いだそうとする点で，トップダウン型の宗教といえよう。そのキリスト教の中でもカソリックとプロテスタントでは大きな違いがあるし，神学，すなわち教理の考え方は提唱する者によっても大きな違いがある。

本論考では宗教と医学，特にキリスト教と医学を考える中で，近年の代表的な神学者であるカール・バルトを取り上げ，その神学における病気についての考え方をみることによって，医療にたずさわる者が自らの医学・医療をどうとらえるかという課題を，ひとつの逆照射の光のなかで考えてみたい。なお以下の論述の細字表現のうち，バルトからの引用は文末の［ ］内の数字で邦訳[1)]の頁を示す。

2．カール・バルトとその神学

キリスト教は神から下る使信を，その教理や神学の根拠とする。具体的には聖書とその記述である。近代になって聖書が人間による書物であるとして（もちろんそれは当然だが），歴史的批評的に解釈される中で，例えば新約聖書における教えのいくつかは書かれた当時の信者の神学や思想として脇におき，奇跡物語は迷信として捨て，おそらく間違いなくイエスが述べたであろう言葉をもとにキリスト教神学の再構築がはかられた。この立場にはルドルフ・ブルトマン[2]はじめ多くの神学者がいる。

しかしこうしたイエスの原像（「史的イエス」と呼ばれる）を組み立てること自体に学問的に無理があることがしだいに明らかになり，20世紀にはいると，聖書が歴史的に限定された文書であることをふまえながらも，なおそこに神の言葉を見出していこうとする新しい神学が成立した。それを成し遂げたのがカール・バルトである。

彼の神学的な著作は膨大な数と量におよぶ。主著である教会教義学は，神の言葉，神論，創造論，和解論，未完におわった完成論（終末論ないし聖霊論）という構成で，キリスト教が始まって以来の主要な議論，例えば予定論，三位一体論，救済論などが取り上げられている。教会教義学自体はきわめて浩瀚なもので，カルヴァンの「キリスト教綱要」，トマス・アクイナスの「神学大全」に比べると，分量の比は１：４：９だと言われる[3]。このような広範かつ徹底的なバルトの神学を論ずるなどという大胆なことは到底できないが，一読者のささやかな個人的理解という立場で，彼の病気論といえる論述の中心と筆者が考えるところを本論考では述べる。

ところで見方によってはバルトの論旨は簡潔で，ある一点を出発して，神学的テーマをぶれずに徹底的に論じているように読むことが可能と筆者は考えている。その出発点とは「イエスがキリストである，（あるいは）神が人間になった（旧約聖書に出てくるイザヤという預言者の表現でインマヌエルという名称）」という信仰的出発点である。つまり「歴史的な存在であるイエスという人間が神の子であるキリストだ」という信仰である。

この出発点はキリスト教ではごく自然であり，こと新しいことではない。特徴的なのは，神学上の諸命題・諸問題をすべてこの出発点「のみ」から展開していくというバルトの論法である。この出発点を堅持し，人間的・哲学的な諸前提を徹底的に排除し，もっぱら聖書に示される神からの使信のみに依拠し論ずるバルトの姿勢は，しばしば「キリスト論的集中」と呼ばれる。論じる対象はもちろん神学的な諸問題であるが，その範囲内で人間生活に関係する問題も取り上げている。病気や健康についての論述は多くはないが，主著である教会教義学でとりあげているのは第３巻の創造論であり，本論考ではそれを対象としてバルトの神学的な視点から病気・健康を考えてみたい。

3．創造論第3巻第55節「生への自由」における病気論

3－1．健康とは「力」である。

バルトは病気を論じる前に，その対照である健康に目をとめる。彼によれば健康とは一種の力であり，ある種の感覚的なものは確かに含むが，感覚それ自体ではないという。

医師のような専門家の判断・診断に先だって，人間は健康であるという判断をある種の感覚として捉えているという常識的な体験をバルトは肯定する。しかし健康はそうした感覚だけでなく，むしろある種の「人間的な力」として捉える必要を述べる。この力とは，人間が人間であること，そのような人間の在り方の力として彼は健康を，そしてその反対の病気を考える。

3－2．それ自体としての健康

第2に彼は，いわば「それ自体としての健康」といった問題をどう考えるか，あるいはそれを人は欲することができるかを論じる。

> バルトはこの点に関してR・ジーベックという医師の意見を引用する。「健康は，何のための健康かという問いをぬきにして，実現されない。われわれは，言うまでもなく，健康であるために生きるのではなく，生き，また働くために，健康であり，健康であろうと欲するのである。ただ，努力の傾注と仕事の達成の中でだけ，健康は，われわれに委託されたよきものである。健康は最後的な自己目的ではなく，生の意味を通して規定され，限界づけられている」。[72]

先に述べたような「人間であること」を目指す明確な目標がたとえはっきりしなくとも，われわれが健康を目指すことにバルトが理解を持たぬわけではない。しかし健康の第一義的意味はあくまで先に述べた「人間であることへの力」として考えることであって，バルトは「保健に役立つ悪霊」という言葉で，健康を自己目的として欲することに警告を発している。

現代的に解釈してみよう。我々は健康診断を受ける。これは病気の予防という点で大事なだけでなく，もしそれがバルトが掲げる目的にそって行われるのなら彼は否定しまい。それは健康への意志としても大事だしバルトもそれを認めるであろう。しかし健康の獲得・保持それ自体が自己目的となるような健康への志向性に対して彼は疑問符を打つ。

3－3．生への畏敬

バルトはシュヴァイツアーの提唱する「生への畏敬」，筆者の言い換えになるが，「生への無原則的な畏敬」には疑問符を打つ[4)]。人間を含むあらゆる生命へ対して無原則的・無制限的な畏敬をシュヴァイツアーが唱えたことは周知であり，それをシュヴァイツアーの全体的な思索のなかにみていくことにバルトはもちろんやぶさかではない。しかしバルトが考える生への畏

敬とその根拠は，それを神からの借り物，人間が管理すべきものとして考える点である。

死が近づいたとき，人はしばしば「生きているのではなく，生かされている」という感覚をもつという話は臨床の現場で聞く。それは多くの死にゆく人にとっての実感なのであろう。人間の生は神からの賜りものであり，人間はその管理者であるという立場にバルトは立つ。

この「借り物の生」という考え方は多くの宗教で提唱される。しかし言葉ではよくわかるが実感として理解することはそう簡単ではない。バルトの見解を筆者なりに引き寄せて例を用いて考えてみたい。

今ここに自己の所有物として美しい花瓶があるとしよう。花を生けることもできるし，花瓶自体を観賞することもできるだろう。またカビが生えそうになったりごみが付けば，われわれはそれをきれいにし場合によってはあれこれ手入れするだろう。一方何かひどく腹の立つとき，うっぷん晴らしに地にたたきつけて壊してしまうこともできるかもしれない。あるいは花瓶が汚れていても，他にしなければならない忙しさの中で，きれいにすることを忘れてしまうかもしれない。

しかしその花瓶がもし大事な人からの借り物であったとしたらどうであろうか。その人のためにも花瓶をきれいにし，貸し主が訪れるとききれいになっていることを観てもらい安心してもらうために手入れをするであろう。ましてや石にたたきつけて壊すようなことはしないに違いない。借り物であればこそきれいにし，花を飾ってより美しく観賞するのではないか。

以上述べてきたことはあくまで例えであるから，人間の生と直接的に結びつかないかもしれない。しかしバルトは神学者として，死に近づいたときに人が感じる生のこの側面を，日々の生活でも神から与えられたものとして現実感を持っていくべきと勧めている。

３－４．許されている健康

先述したようにバルトは「健康とは人間であること（Menschsein）への力である」と定義づける。加えて強調するのは，健康であろうとすることは神によって「許されている」ことだという。健康を追い求めるという共通点があったとしても，自らの健康がだれに由来するのかという点が異なる。

バルトはもちろんすべての事柄を当然神の恵みとして捉える。自分のものだとして人間が自分の健康を自ら損なうことをバルトは認めない。健康であることは神から与えられ，管理しなければならない責務をもった領域だという。

バルトは神学者であるが，神学や教義学を理解するために，この世の出来事を知る事，例えば新聞を読むことが大事だと言う。そうした神学を離れた論述と言えるのかもしれないが，健康である人は健康を意識せず，従って健康であろうと欲することをしないのだと言っており，もしそういう意識や意志があるとすれば，それは健康に欠けたところがある証拠だと言う。

またすでに述べた通り，それ自体としての健康，あるいは健康自体を人は欲することはできるかと自問する。もちろん全否定はしないのだが，健康それ自体を目的とすることは，彼の表

現で言うと「保健に役立つ悪霊」である場合があるという。時代的な背景は明らかではないが，現代にもある健康志向，つまり健康がなぜ必要なのかを問うことなしに，とりあえずの健康，あるいは健康の助長への片よった志向に彼は批判の目を向ける。

一方彼は病気を持った者が一方的に人間的な無力の状態におかれているわけではないという。つまり「病人の健康」がありうるというのである。病気をしていてもなお人には健康の部分があり，病者本人やとりまく人々にとって重要なのは，病気ではなく，病者の中にある健康であるという。

> 病いの床での倫理の基本的な要請は，病人がこの意味で，まず自分の病気に主な視線を向けて語りかけられるのでなく，むしろ自分の健康と，彼に命じられている健康への意志に主な視線を向けて語りかけられ（ansprechen lassen），自らもそれに視線を向けて語っていくこと（ansprechen），彼のまわりの人々が特にまさにその点で事欠かないようにするということである。[74]

逆に健康な人たちも，ある部分病気のところがあるのであり，彼らもまた健康への意志を必要としているという。

医師はこれまで述べてきた健康の目的である「人間であることへの力」それ自体を提供することはできない。神のようにそのような力を人間に付与することはできないという。自らの分をわきまえるという姿勢をもち，生きることへの機能の領域で働くことが医師の本領であり，この領域の中で患者への援助をひろげ，病気に耐えうるように助け，鼓舞すること，これが医師の本分であるという。医師は，ひとりひとりの人間が神から付与されるべき力，あるいはその反対である無力について決定する力を持っていない。それは神に由来し，どのような患者にも与えられる可能性が残されており，したがって病者に向かって病気と闘う力がないと決めつけてしまうことはしてはならないことだと述べている。

3－5.「裁きの前形式」としての病気

バルトは次いで，「二つの最も困難な問い」として，病気をめぐる2つの局面をあげる。それは病気のもつ「死および永遠の生命の前形式」という側面であり，彼の神学における「裁きと恵み」「否（Nein）と諾（Ja）」と通底する表現と言えよう。

病気の終局は死である。そうした点からは病気は「死の前形式」と言えるとしてバルトはまず次の様に言う。

> 旧約および新約聖書の中で，そこでの場を支配しており，また事柄的にも疑いもなく，繰り返しまず第一に，考慮されるべき局面――は，〔そこで〕病気が死の（しかも神の裁きとして，人間が罪によって陥ってしまった虚無的なものの力に身をまかせてしまうこととして，

彼の上に来，またそのように理解されるべき死の）前形式および先駆者に属している局面である。[91]

病気は人間の面から言えば罪の結果であり，神から言えば否定された「左手にある国」の一つの要素である（ただしもちろん「裁きの前形式」としての病気が「地獄」に連なっているなどとバルトはのべない）。

本論考ではいわゆる原罪，すなわち神との関係における罪の起源に関する神学的議論，特にバルトのそれに関してはふれる余裕がないが，罪が人間と神をへだてていること，バルトにそって表現すれば「質的相違」の状態にあることは，彼の第1声といえる「ローマ書」[5]の焦点である。

西欧キリスト教の伝統的な考え方と同じく，擬人化されて表現されることがあることは認めるが，バルトにおける悪は神の正義と相対する独立した存在ではなく，虚無と表現できる状態である。

非宗教的・非信仰的に考えて，また現実的に，人間は例外なく死ぬ運命が定まっていることは言うまでもない。その「前形式」が病気であると言うのならば，現実における運命としての死に向かう病気，キリスト教的な意味における罪の結果としての死に向かう病気という，人間にとってどうすることもできない事態に対して人間のなしうることは何か，何らかのことをなしうるのだろうか。せいぜい嘆息か，あきらめか，単なる信心や願いごとの祈りか。

バルトは言う。否。ただ手をこまねいていることは敗北主義だ。残された力（病者にも残っている健康）をもって自分自身を保持し，最後まで抵抗することだという。それはキリスト教的に言えば神への服従になるという。なぜかならば，神であるイエスがすでにその道を歩き，実践し，この死の力に勝っているからである。だから上述した敗北主義は神への不服従となるのだと言う。

言うまでもなく，左手のあの国に反対して，立ち上がり給い，そのような国の〔もろもろの〕力を，そのようにしてまた病気の力をも，イエス・キリストの中で，イエス・キリストが身を献げ給うこと――それは，滅びにとって滅びとならなければならなかったことであるが，そのイエス・キリストが身を献げ給うこと――の中で，すでに打ち破られ，鎖につなぎ給うたということを見過ごしているのである。[94]

現実に病気と対峙するとき，また病者のかたわらに立つとき，自らがほんの少ししかなしえないなどと考えず，また他を助けることができないなどと考えず，病気に対して「否」を語るべきである。

ただしもちろん，こうした否や抵抗は，死という裁きが神の事柄でないならば，無益である。この文脈のなかでこそ，信仰と祈りは戦いにおける不可欠な条件として一瞬たりとも視野から

見失われてはならないと言う。それは神の正しい裁きに，加えてそれ以上にすでに勝利者となったイエスからの励ましによって生起すべきである。

バルトはオカルトとは別な「癒しの賜もの」という神的な癒し，医療のような人間的な癒し以外の癒しを否定はしない。しかし「死の前形式」である病気に対して人間が立ち向かう姿勢として例示するのは「怒り」である。

これは彼よりかなりさかのぼって時代におこった，ゴットリービンという悪魔憑きの女性の癒しにたずさわったブルームハルトという牧師の言葉として，また姿勢として残されているものである（この事件とその周辺に関しては筆者の論文参照[6]）。

> ブルームハルトはこの事件を「戦い」とよび，それに関わった彼の基本的な態度を「忿怒（Inglimm）」と表現している。バルトはこれを「（キリストの属性である）王的な憤懣」と呼んでいる。ブルームハルト牧師はゴットリービンに出会ったとき，次のように語ったという。「手を組んで，こう祈りなさい，主，イエスよ，わたしを助けて下さい。わたしは，悪魔がなすことを十分長く見てきました。今，わたしたちは，主イエスがおできになることを見たいと思います，と」。また後の報告の中で次の様に述べている。「わたしは，わたし自身と救主の前で，…悪魔に屈服していたことを恥じます。主は誰ですかとわたしはしばしば問わなければなりませんでした。そして主である方への信頼の中で，わたしの中で繰り返し，前進せよとの声を聞きました。イエスが蛇のかしらを踏みくだかれたことがまことであるとしたら，たとえ最も深い深みにおちるとしても，必ずやよい目標に導かれるに違いありません」[100]。罪と病気の間，赦しといやしの間の関連は，彼にとって希望を意味したという仕方で明らかであったとバルトはいう。

３－６．「永遠の生命の前形式」としての病気

病気によって死がより身近になるとき，人間はその生が限定的であること，キリスト教的にいえば人間の生と力は神の生と力のようではないことに思い至る。現実のなかで考えれば，人間は限定された時間の中で，特定の生を生きる。この限界づけは神によるとバルトは言う。

> 人間の生は，また神のよき創造者としての意志に従っても，したがって自然的な正常な仕方ででも，始まり，また終わる，したがって限定された生である。[102]

病気から導かれるこの限界づけの感覚が，だからこそ人は神によって支えられているという実感につながり，そのいやはてに，病気への忍耐は「喜び」へとつながるとバルトはいう。これは何も死後に極楽や天国があるということを述べているのではもちろんない。この神に支えられているという信仰と実感のなかで，始めて人は祈り・願いが空虚なあきらめではなく喜ぶにつながる。だからバルトはこれを「永遠の生命の前形式」というのである。

4．まとめ

以上のバルトの論述を読むと，罪・裁き，永遠・救いといった言葉を別にすれば，日常臨床の体験から出発して臨床家が感じ取る病気や健康と大きく食い違うところがあるとは思えない。キリスト教徒でない者が同じように感じ，いきつく境地をキリスト教的に意味づける一つの例とみることも可能だろう。しかし病気と戦う力と根拠について，病者が自らの病気を通して到達する場所が，バルトのいう神の言葉からも照射されると考えることが可能と思える。もちろんバルトは，こうした人間からの出発が，すぐに神の領域，神の右手の国に至るわけではないと釘をさすであろう。ただしそれを望み見て，出発しようとする契機は生まれうるのではないか。その決断は個々の病者にゆだねられるが，少なくとも目指す領域としての「神の国」（つまりは「神の支配」）の存在を提起しているところに，バルトの病気論の意義があると考える。

謝辞　宇都宮輝夫先生（北海道大学名誉教授）からは，長年にわたってカール・バルトに関しご教示いただいた。記して感謝したい。ただし本論考の文責は全て著者にある。

文献

1．バルト，K（著），吉永正義（訳）：創造論Ⅳ／3（教会教義学第3巻）．新教出版，東京，1980
2．ブルトマン，R.（著），加山宏路（訳）：共観福音書伝承史（ブルトマン著作集，1－2）．新教出版，東京，2004
3．ファングマイアー，J.（著），加藤常昭ら（訳）：神学者カール・バルト．日本基督教団出版局，東京，1971
4．福嶋揚：カール・バルト－破局のなかの希望．ぷねうま舎，東京，2015
5．バルト，K（著），吉永正義（訳）：ローマ書（カール・バルト著作集，第14）．新教出版，東京，1970
6．大宮司　信：メットリンゲン－悪魔憑きと「神の国」思想をめぐる病跡学的考察．北翔大学人間福祉学研究．第18号：11-32，2015